

解き理系女子

豊橋技術科学大学の挑戦⑥

子どもとは「毎日電話をすること」「毎週末には自宅に帰ること」を約束。車で片道約3時間の道のりを毎週通いつめた。自宅に帰った土日には家事もこなす。体力的にも負担は大きかった。しかし、その往復の時間も車内で英語のリスニングCDを流しっぱなしにし、「おかげでリスニング力が大幅に向上した」と笑顔でサラッと話す。子ども

が大学生になった現在、夫は「さすがに毎週帰らなくてもいいよ」と言ってくれている。

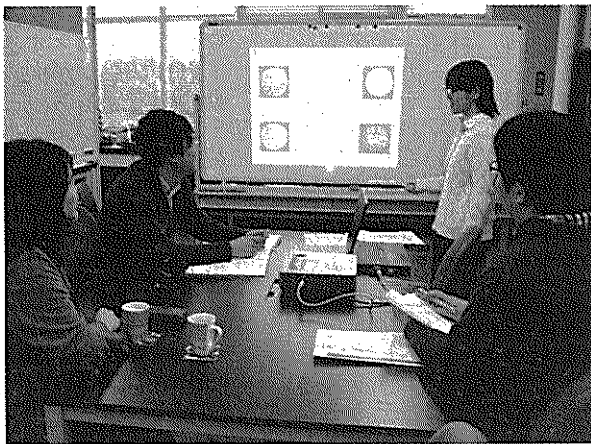
中野さんが指導する学生、横山宣幸さん(環境生命工学系修士1年)は「2カ月の間のマレーシア企業でのインターンシップで感じた日本との違いは、マレーシアの女性は結婚してからも、子どもがいても仕事を続けている」と話し、社会的な立場として仕事を供給する場面が提供され、男性自身も向き合っていないかなくてはいけないと考える。

男女の枠超える―若い世代 感覚の変化

古谷彰平さん(同)

は今回のシンポに参加して「国の政策は聞いていたが、具体的な大学の取り組みを聞いて、思った以上に工学系で女性が少ないこと、再就職が難しい現状を知った」と話す。女子学生の奥住明日香さん(学部4年)は「所属する吹奏楽部では、

重い楽器を男子が運んでくれたり、部内でリーダー的立場に立っても男子の協力が得られる」と、学生間での男女差を意識しない。男子学生らは、将来自分の妻が働くことに違和感なく賛成でき、家事も得意だし、全面支援する意思があるという。奥住さんは将来「海外で活躍したい」と



研究室での様子

いう夢を持つ。

中野さんは、そんな若い学生たちが将来、男女の枠を超えて活躍し、今後の人口減少社会を持続可能社会へと支えていける人材へと育つよう期待する。そして大西学長のもと、研究と同大の理系女性支援のための取り組みを続けている。

豊橋技術科学大学 中野裕美男女共同参画室長が語る(下)

(戸崎史子)